

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

<研究ノート> 幼児の母子発達相談と他機関との関係発展について

著者	小沢 日美子
雑誌名	埼玉学園大学紀要．人間学部篇
巻	9
ページ	267-274
発行年	2009-12-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1354/00000635/



幼児の母子発達相談と他機関との関係発展について

Evolution of relationships with childcare institutions through developmental consultations for mothers and their small children

小 沢 日美子

OZAWA, Himiko

Evolving relationships within the framework of developmental consultations were analyzed from the following perspectives: (1) circumstances behind the consultation, (2) situation of the consultation, (3) relationships with childcare institutions, and (4) new relationships. As examples of the typical evolution of relationships with other people, the case studies of five small children, a 2 years-old child, a 3 years-old child, a 4 years-old child, a 5 years-old child, and a 6 years-old child are presented. As opposed to general individual counseling, counseling in developmental consultations has a complicated structure consisting of three persons, the mother, a child, and a supporter (e.g., Kitahara, et.al. 2006). Developmental consultations should include a structure for starting the process of change in the mother-child relationship, as well as the two-person relationship between the child and surrounding adults. Through the counseling processes, changes in the child-parent relationship and the mother's reconfirmation of her and other people's capabilities leads to the development of relationships with others and with childcare institutions.

1. 問題と目的

様々な子育て支援が求められている今日であるが、子どもとのかかわりに養育者－母親（注：養育者を代表して、母親と記する）が戸惑い、それゆえに母親自身が他者との関係に悩んで、周囲との関係が築けずに親子間の二者的な関係にとどまることも少なくない。親子二人の関係は、子どもにとって発達・成長の安全基地となるが、他者との関係の中における子どもの居場所づくりでは、親自身も他者との関係に参加する機会が徐々に増える。

したがって、子どもが、親子二人の関係の中から、地域社会の中に入っていくときには、親子二人の関係の変化や親の子どもの捉え直しなど、母親自身にも認識や行動の変化を求めるきっかけとなっている。しかし、仮想物語文を用いた学生対象の調査研究から、北原ら（2006）は、母親が利用する発達相談と一般的な個人カウンセリングとの相違を次のように指摘する。幼児期の子どもに関する発達相談場面は、親・子・支援者の三者から成る複雑な面接構造となり、面接までの経緯も多様であり、扱われる問題の程度・広さ・認識

キーワード：発達相談、親子関係、幼児

Key words : developmental consultation, relationship between a child and his parents, a small child

される対応緊急性も重く大きい。けれども、実際の今日の多くの発達相談は、親子二人の二者関係の改善という限られた視野の範囲で事態が収束される性質のものとは言い難い。むしろ親子二人の関係が変化し、母親による子どもの捉え直しが行われる過程に随伴して、子どもと子どもの周囲との関係の変化や、子どもの周囲による子どもの捉え直しの展開が共に行われているような構造的な性質を発達相談が包含している側面が浮かびあがる。したがって、発達相談者は子どもの心理査定やフィードバック時の母親の心理的サポートという閉じられた状況において専門的な役割を果たすこともあるが、いま、ここの相談場面の関係の変化と、子どもの他者との関係の中における居場所における関係の変化を捉えながら、相互の関係を調整していく役割を重ねて担うことも多い（e.g., 義永・小沢, 2002）。

ここでは、発達相談に心理相談者として筆者がかかわった地域での相談活動から、養育者である母親と他機関とのかかわりが促された典型的な5つの事例（※年齢は初回日）を取り上げる。そして、その経過および内容、関係の変化について、（1）相談に訪れた経緯、（2）相談場面の状況、（3）他機関との関係、（4）閉じた関係から開かれた関係へ、の4つの観点から、分析・考察する。

II. 事例

事例1：発達相談をきっかけに子育て支援グループ参加に動いた事例

〔主訴：ことばの遅れ、理解の遅れ

（2歳11ヶ月女児）〕

経過：（1）相談に訪れた経緯：父親の転勤で半年前にO市に転入してきた。近隣に気軽に話ができる人や親子での友人は少なく、日

中、母親は子どもと二人きりの生活の中で孤独感を抱えていた。自転車で行ける所にある児童館を親子で利用するようになって、子どもが他児の中に入る様子は見受けられなかったが、次第に子どもが懐くようになったスタッフから発達相談申し込みの案内を母親が受けて相談に訪れた。

（2）相談場面の状況（単回）：母親は、子どもと一緒に近隣の公園などで他の母親や子どもの中に入り込めない思いを抱え続けてきたこと、子どもの言葉が遅いことから育児書やマスメディアの情報から不安を高めるものの、具体的なことがわからず、さらに母親の育児に対する負担感を高めていた。日常生活の様子を語りながら、当日一緒に訪れた子どもの発達の様子を確認して伝える。母親は発達相談に来て、「子どものことを落ち着いて話すことができて気持ちが落ち着いた」と話す。そして、子どもと保育士と母親でグループ活動を行う週一回半日の集まりに本児の発達を促す場として参加を希望する。

（3）他機関との関係：継続的に子育て支援グループに参加する中で、母親同士の関係の中に入っていけるように母親の情緒的なサポートをしながら、子どもとのかかわり方を具体的に助言していくことを相談者からグループの担当者に引き継ぐ。

事例2：発達相談をきっかけに親子グループへの参加に至った事例

〔主訴：ことばの遅れ、発音不明瞭、発達の遅れ（3歳7ヶ月女児）〕

経過：（1）相談に訪れた経緯：母親から保健センターの3歳児健診で言葉の遅れの相談があった。しかし、その後、他機関での親子グループによる療育活動への参加を母親は勧

められるものの、保健センターでの週1回のサークル活動にも休みがちだった。親はことばの遅れは心配しているが、まだ幼いとして発達の遅れを理解しない様子から、子どもの発達に関する心理相談を勧められて相談に訪れた。

(2) 相談場面の状況(単回)：母親からこれまでの経緯と気になる子どもの様子を、子どもと一緒に遊びを交えて関わりながら話を聴いた。母親からは、子どもの気になる行動や心配な気持ちが話された。年齢が上のきょうだいと同じように愛情をかけて関わってきたにもかかわらず、いまの子どもの行動の理由が分からないこと、言葉の遅れを相談したものの子どもが障害をもっているのか不安になり辛い気持ちで過ごしていたことが語られた。さらに、家族や周囲の目も気になって傷つきを深めていたことがわかる。いまの母親の傷つきや悩みを知り母親を支えながら、子どもの発達の特徴を整理し、伸びてきていること、頑張っていることを伝え、子どもの発達を豊かにするための方向性と社会的資源の役割を伝えた。母親は頑張っているが子ども自身も困っていることを認めて、親子グループへの意欲を高めて参加に至った。

(3) 他機関との連携：子どもの一生懸命な気持ちを認めながら、母親と一緒に他者との関係の中で子どもの居場所を見つけて行く姿勢、子どもとのかかわり方の工夫とともに発達の特徴を伝える態度によって、親が子ども自身を肯定的に受け入れやすいことを保健センター担当者に引き継ぐ。

事例3：子どもの発達の特徴の理解から家庭と園の協力につながった事例

〔主訴：周りが見えていない、下の児を叩く

(4歳0ヶ月男児)〕

経過：(1) 相談に訪れた経緯：「ことばを話し始めるのが遅く、今は(ことばは)普通だが、園での集団行動が苦手ということが気になる」と、母親自身で相談に訪れる。みんなで輪になっているとき寝そべる、他の子の椅子に座わろうとする。周りが見えていない。楽しいと興奮しちゃう。愛情表現がうまくできないのか下の児を叩くことも心配していた。

(2) 相談場面の状況(継続相談4回)：①子どもの発達状況を母親より聞く。病歴等なし。お座りは9～10ヶ月。最初ベタッとずりバイ。保っていられるのが遅く、すぐに動き出してしまった。9ヶ月健診では体の問題なし。歩き始め1歳過ぎ。後追い、人見知りは下の子に比べると余りしなかった。初対面の人に固まる様子。仲のよい子とは一緒に遊んでいて、興奮すると叩いてしまう。仲のよくない子とは一緒に行動せず、一人遊びをしていることも気なっている。子どもと相談者と母親との遊びの中で、子どもの気持ちを汲み取りながら、かかわっていくことを伝える。母親は第一子でもあり緊張しながらの子育てで戸惑いも多いようだ。②母親より希望のあった発達検査を行う。検査場面から注意の転導や興奮し易さも見受けられた。③現在の発達の様子や子ども自身の困り感を伝える。緻密にきちっと捉えて物を操作するなど伸びている所、全体的な枠組みが捉えきれずに応じられないなどは取り組みえない所、このようなアンバランスが自分を状況に位置づける際の不安定さにつながることもあるなど発達の特徴を伝える。そして、枠にはめるよりも気持ちを汲み取って、子ども自身の安定し易さを支持するかかわりも大切であることを伝える。④子どもの発達の特徴を親が知ることで、子

どもの行動を発達の過程において見守って行きたいという姿勢が語られる。園の先生たちとも話をし、母親自身ほっとしたという。

（3）他機関との関係：相談の過程で親は、子どもの周りが見えていない様子がこれまでも気になって来ていたことと併せて、発達検査などから見えてきた子どもの特徴について園に伝える。園も心配していたが、母親からの情報で就学までの見通しを立てて関わって行きたい旨を、母親に伝える。

事例4：園からの母子関係の調整が動き始めた事例

〔主訴：他児への攻撃的なかわり、発達の遅れ（5歳11ヶ月男児）〕

経過：（1）相談に訪れた経緯：園の集団活動に参加できない。園の日々の送り迎えでは、母親は仕事の理由からせわしく落ち着いて子どもの様子を伝えることができなかった。園は、子どもも親も互いに向かい合っていくきっかけとして発達相談を母親に勧めた。

（2）相談場面の状況：最初に子どもの行動観察を行った。続いて、母親から相談者が子どもの様子を聞く。母親は仕事と家事で追われる中で、これまでも子どもとの向かい合いの時間をつくり、夜寝る前には一緒に話をしたり本を読んだりしていることを話す。そして、朝出かけるときに、園の先生の言うことをよく聞き他の児に手を出さないことを約束したその日に、それが守られなかった時の悲しいやりきれない気持ちが語られる。相談者は、子どもも母親の約束を守ろうとしているから母親に正直に言えなかったことを母親が認めてやれるように状況を整理していく。そして、集団状況における本児の行動と発達の状況との関連しているところを説明する。母

親は、母子の努力が認められたことで気持ちが落ち着いたという。その後に園長と担任と母と相談者で話す。子どもが集団で自分の気持ちを素直に表現していくにはどうしていったらよいか、これから先の見通しと一緒に考えていく。保育場面と家庭の様子それぞれの話しをし、子どもの発達を確認して、それぞれの生活を見通して、子どもの発達状況に合わせたバランスを考えた指導や工夫のための視点を相談者より提案する。今後も家庭と保育の場が情報交換し、子どもと一緒に関わっていけるように話をする。

（3）他機関との関係：相談場面の後に、園と家庭とでお互いに情報交換をしながらも、園が両方の場の子どものためのバランスを考えて子どもに関わり、母親に助言していく役割をこれから園が取ることを提案する。ここでは、母親に、子どもの発達を見守る姿勢も大切なことを伝えるように促す。

事例5：親子関係の変化とともに園との関係が展開した事例

〔主訴：落ち着きがない、就学問題〕

（6歳0ヶ月）

（1）相談に訪れた経緯：園から勧められ半信半疑の思いのまま就学相談に申込むものの相談の必要を感じて知人から話を聞いて発達相談に訪れる。園は他児とのトラブルが増えた年中終盤より子どもについての心配を家庭に積極的に助言・指導している。

（2）相談場面の状況（継続相談10回）：①〔主訴〕落ち着きが無い、興味がある事には集中できるが、興味の無い事には集中できない、幼稚園では友達と遊ぶことよりも一人行動や先生と遊ぶことを好む、自分の思い通りうまくいかない事があると大泣きをする。もしか

したら発達障害なのかもと思っている。〔生育歴〕家族3人（父、母、本兄）。座位8ヶ月（じっとしていない、手が伸びちゃう、座ることに興味がない）。始歩9ヶ月。人見知り、後追い、指差しはあったが遅かった。始語1歳10ヶ月。年中の中盤より他兄とのトラブル、集団場面で先生に頼ることが目立つ。年長になると困ると泣いて訴えたり、先生の話を取引したり集団指導からの逸脱が目立つようになったという。家では困ることはない。3人以上のゲームでは順番を待てないものの対戦式のゲームは先を見通して取り組める。②母親の希望により心理検査を実施する。既に獲得した知識を用いた言語力は強いが手先の作業では慎重である。取り組みでは、枠組がみえない状況におかれることを避けるように「これは～だよ」など自ら事態を確認することがしばしばあった。ただ、検査者の共感的態度で気持ちの安定を保つこともできる。③検査から理解されること、得意な課題と苦手な課題に大きな差があることなど子どもの発達の特徴を伝えて子どものあり様を共有する。とくに知識などの言語能力の強さがみられるものの、課題枠への気づきにくさや情報処理の慎重さなどから予想される弱い所も伝えた。行動上の不適応は、子どもの素因のほか、日常場面での困り感からの情緒的要因との関連も考えられることから、具体的な場面やエピソードを取り上げてそこでの子どもの姿を共有する。④母親は子どもに仲の良い友達が数人いて気分がむらがあるものの他兄を気遣うことができ、やがて落ち着くと思って子どもを信じていた。しかし、集団場面では担任の先生に頼ることが多く、年長になり他兄とのトラブルが増えて母親としての自信が揺らいでいたという。子どもが悪い子という訳

ではなく、発達上の特性として認めてやることで母親も落ち着けるようになってきたという。もともと母親にとっても子どもは安心して存在で、家庭で母親の困り感は無かったと腑に落ちるようにして話す。⑤～⑥この時期、就学相談を受けるための手続きが進められていた。一方で、園の行事参加のための練習で子どもが注意を受けて再び母親の気持ちが動揺する。母親が子どもの困り感を分かち合い支えて行けるように発達の特徴の良い所なども含めて子どもを総合的に理解して行けるように促す。就学相談担当者と本相談者は子どもの状況について情報交換を行う。⑦園行事当日、皆と一緒に参加した子どもの姿を見て母親は安堵する。就学へ向かう子どもの成長を見守ってやりたいと話す。⑧～⑩母親が園の先生方と面談したと話す。園はそれまでの子どもの行動から他兄との関係などに心配を高めていた。しかし、その後、子どもの得意なことをクラスの中で取り上げる機会がふくまれて他兄との関係調整が図られることが多くなった。母親は子どもの発達の特徴から状況への気づきの弱さがあるが、他者との関係の中で育って行けるように出来ることを努力して行きたいと話す。

（3）他機関との関係：園により母親に勧められた就学相談申し込み後に訪れた発達相談だったが子ども自身の行動にも成長が見られて情緒通級学級の利用は見送る中で、担任の先生や園との関係も徐々に変化し、年長の終わりに向かい、集団行動でも達成感を味わうことができるようになってきた。

Ⅲ. 考察

（1）相談に至るまでの経緯の特色と課題

乳幼児期における発達相談は、今日、子育

て支援の視点から、従来各地域で行われて来ていた活動が充実されて行く中で、発達相談の窓口や専門関係諸機関、また、園・学校等との関係などが縦横に繋りを広げながら展開されて来ている。また、近年では、インターネットの利用も含めて発達相談活動についての情報を入手することは比較的容易になって来ている。ただ、実際に発達相談に訪れるかどうかは、子どもの発達の様子だけでなく、親子を取り巻く周囲の環境とも関連している。また情報供給過多による母親の側の過敏さや不安から、発達相談の機会を求めるような場合もある。しかし、健診時や保育園・幼稚園での行動から、発達相談を勧められた場合には、母親の側の課題意識が熟していないことも少なくない。まずは母親自身が安心でき守られているという安心感がどのようにつくられるかは、その後の他機関との関係に影響を及ぼすと考えられた。事例1は、児童館スタッフとの関係、事例2は健診でのスタッフの関係、事例3は自主来所だが園での様子が関係しており、事例4は園との関係、事例5は自主来所だが園からは就学相談を勧められた経緯があった。ここでの事例からは、担当者と子どもとの関係づくりのあり方や各所の専門機関・専門家としての信頼感、家庭の側の準備状態などの影響が考えられたが、特に、適応上の子どもの課題が顕著になる一歩手前か少なくともいろいろな見方が可能な段階での発達相談への導入が、関係機関と母親ら保護者との関係づくりを進めることが示唆された。また、既に子どもが集団の成員である場合、母親ら家庭や他機関それぞれの全体の状況を見渡して支援を進めて行く立場を相談員が取る場合もあるが、園など他機関がその役割を取れるようにつないでいくことも、子どもを

取り巻く状況の伸展に重要であると考えられた。したがって、発達相談者の役割としては、子どもの発達を見極めて母親を支え親子関係を調整しながら、親子と他機関との関係を調整する調整機能と、その関係の中に調整機能の芽を捉えてそれを促進することが含まれていると考えられる。

（2）相談場面の状況で親が子どもへの気づきを深めて行く過程

親子の関係の変化を親の変化の側面から考えると、母親の気づきが、情緒・行為を変えて行くことから、それぞれが相互に連動していることが落ち着いた状態を示す。相談の過程では、一致していなかったり、あまり関連しなかったりしていることもありえる。

次に親が子どもへの気づきを深めて行く過程①～③について、事例1～5より検討する。

①母親の自分自身の気持ちへの気づき：母親として状況を解決したい気持ちから子どもを見つめる目と、子どもの問題を自分の問題のように感じている心とで、子ども自身が見えなくなり、親が自分自身の気持ちを見失うような不安定な状態（例、孤独感、自信喪失）にある。これまでの子育て－子どもとの関係の中で、積み残してきた思い（例、傷つき、失敗体験）を言葉にして、親が自分自身の気持ちを客観的に捉え直したり、自分自身の気持ちを深めたり、視野を広げることへとつながっていく。②母親の自分自身の捉え直し：親自身が自分の気持ちに気づくことで、親の気持ちが変わっていき、（萎縮するなどしていた）子どもの姿も見えやすくなってきて、母子合同面接での、いま、ここの子どもとのかかわりに心が動き、それを相談者と共有しながら、さらに理解を進めて行くことで、子育てにおける課題（例、「叱る」、「しつける」）か

ら「見守る」、「手助けする」を意識するようになる。子どもとのかかわりを新たな視点から捉え直し、先を見つめるようになり、母親自身が安定して来るようになる。母親の視点から子育ての中でのかかわりを工夫するようになって、子どもの変化に気づき、子どもとの関係にも自信を持ち始め出す。

③子どもと親で成長できる関係を他者との関係の中で展開：子どもや親と、保育者らが、これまでに積み残したものや子ども理解や相互の関係づくりで不安定な要素（例、発達状況の理解）を整理し、子ども、養育者、保育者が、先を見つめながら関係が動きだし、必要な環境づくりを促す機能を相互に担い合うようになっていく。発達相談での出来事をきっかけにしたり、他機関との関係や連携の中での出来事によって展開が促されたりするようになって行く。①～③までの段階が、子どもや親や保育者など、それぞれの中で行きつ戻りつしながら移行していくことが考えられた。

(3) 他機関との関係の動き

親子が、いま、この守られた状況の中で相談員という他者との関係の中で自己を捉え直すように親子関係が変化して行く中で、今までとは異なる視点からの気づきや思い、かかわりを見つれたり増やしたりして出すことがでてきた。その先を新しい環境の中に、あるいは、これまでの環境における新しい関係の中に見つれたり、つくったりして行くことにつながる動きとなった。発達相談は、親子関係が他者や他機関に開かれた関係をつくり出していくためのきっかけになって行く関係調整機能を担っている。親と子どもが、他者との関係の中でも個人を否定されず守られて受け止められる経験から動きがつくられてい

くことで状況が促進されていった。特に事例5では、母親や相談機関など子どもを支援する活動の中で、園での子どもの様子に変化の兆しもあり、担任教諭らのこれまでとは異なる側面からのアプローチにつながったと考えられた。そこでは、親子の先への動きをつくっていくことから、ただ気になるだけではなく、いま、ここで子どもに大切なことを的確に捉えて行けるような気づきとつながった多面的であってバランス調整機能を含んだ理解であることが影響を及ぼすと考えられた。したがって、子どもの発達の特徴を知ることが、子どもの在り様の否定的な側面から、関係を分かちように動くのではなく、つながりの関係を見つけて行く肯定的な側面からの展開・発展になって行くような機能を担って行けるように専門機関の間で役割を担っていくことも重要であると考えられる。

(4) 閉じた関係から開かれた関係へ

発達相談では、親子の関係調整を行いながら、親子関係が周囲の人々（保育者、保護者、他児など）とその機関との関係の中で変化して行くプロセスをつくっていく方向性の機能が重要になることが多い。親子関係が二者関係に閉じられることで親も子も守られ安らぎを得ることができるが、親が子どもの発達に心配を感じていたり、かかわりに不安全感を抱いたりしながらであると、親も子も新しい気づきを得られずに情緒的にも不安定になり行動も限定的になる（例、攻撃的になる、人に頼りがちになる、孤立感を深める）ことにつながっていく。したがって、親子関係の中で得られにくくなってしまった自己肯定感や親和感が育まれ、相談者や支援者などとの三者関係の中で気づきや感情、行為が動く体験をして行くことが重要であると考えられた。発

達相談が一般的な個人カウンセリングとは異なる親・子・相談者や支援者の三者から成る複雑な面接構造である（北村ら、2006）といわれるが、それは一般的な個人カウンセリングが周囲から閉じた安定し易い来談者と相談者との二者関係の構造であるのに比べて、発達相談は、関係が動きだし易い三者関係の構造に置かれることが多いためといえる。また、子どもの発達過程では早期発見が重要である一方で、診断や査定が前もって定められ難いことも多く（e.g., 伊藤, 1985）子どもの発達上の課題理解と受け止めに時間を要したり、子育てを支援される場との関係づくりにも支援を要したりするためである。つまり、課題との関係における子どもの捉え直しと母親自身の捉え直しが共に進展される構造を包含してつくられた三者関係によって安定と同時に関係の進展がもたらされる重層的な関係構造（e.g., 義永・小沢, 2002）こそが母子発達相談の面接構造の特質であると考えられる。そこで、その進展の先で専門関係機関につながっていく動きが、二者的な親子関係を開いて同時に専門関係機関に受け入れられる関係の中に入っていくことへと向かって行く、そのような人と組織をつなぐパイプ役としての役割が発達相談機関や相談者における役割の一つとしての重要性の認識が増してきているといえる。

〈付記〉発達相談にかかわる場で様々な立場から筆者を支えて下さりまた、ご助言頂きました皆様にお礼申し上げます。

＜文献＞

伊藤義美（1985）. 自閉児マサシの母としての心の

軌跡－母親カウンセリングを通してみたSさんの内的世界－、名古屋大学教養部紀要B自然科学・心理学、29、43 - 70.

北原靖子・藤田啓子（2006）. わが子の発達の遅れを心配する母親の認知感情特性－仮想場面を用いた手続きの試行－、川村学園女子大学研究紀要、17-1、83-100.

武藤安子（編）（1993）. 発達臨床－人間関係の領野から－、建帛社.

中田洋二郎（2002）. 子どもの障害をどう受容するか－家族支援と援助者の役割、大月書店.

小沢日美子（2009）. 発達障害の疑いをもつ子どもと母親の心理的援助とコンサルテーション－発達臨床的検討－、鶴川女子短期大学紀要、27、49-58.

島谷康司・清水 ミシェル・アイマンズ・金井秀作・長谷川正哉・小野武也・沖貞明・大塚彰（2008）. 広島東部3市における乳幼児健康診査後の支援体制と連携について、人間と科学 県立広島大学保健福祉学部誌、8-1、167-172.

田中千穂子（1997）. 乳幼児心理臨床の世界－心の援助専門家のために－、山王出版.

田中守（2007）. 治療教育における母親面接－心に傷を負った母親のカウンセリングを中心に－、治療教育学研究、27、41-48.

義永睦子・小沢日美子（2002）. 子育て支援における相談活動の役割について－関係機関との連携の視点から－、関係学研究、30-1、58-59.